



慶應義塾大学ビジネス・スクール

勸業電気機器株式会社

1986年7月、ベンチャー企業として脚光を浴びていた勸業電気機器の資金繰りが逼迫していた。これより1年前の1985年5月1日、勸業電気機器は精密シートコイルを量産 10
する板倉工場（群馬県邑楽郡板倉町）の完成式を行った。挨拶に立った須藤充夫社長は「当社は世の中にない商品をつくることを目標に、磁気センサーのホール素子やモーター用の超薄型精密シートコイルを開発してきた。今後、新工場でシートコイルを量産するとともに、電子機器関連の製品開発に全力を注ぎたい」と抱負を語った。板倉工場は総工費70億円を投じて完成した工場 15
で6月に稼働して、当初はシートコイルとモーターを月間合計 50,000～100,000個のペースで生産し、1985年末には月間500,000個、1986年末には月間1,000,000個の生産を目指すことにしていた。しかし、板倉工場の完成後1年を経過しても、量産体制に入れるほどの注文は入っていなかった。

ホール素子の開発¹

20

須藤充夫氏（1944年3月生）は、栃木県足利市の小学校、中学校を卒業し、16歳で上京して無線技術者養成専門学校の中野無線高校を1962年に卒業した。高校卒業後、計測機器の東京電気精器（秋葉原）に就職し、2年余りの間、電流計、電圧計、標準信号発生器などをセールスを経験した。ビジネスで東京工業大学も廻ったが、教官室に出入りしてうちに教授達の知遇を得た。そこで、仕事の合間をみて、1962年から1965年にかけての3 25
年間、夜、東京工業大学の酒井善雄教授（電子工学）の研究室に通い、研究の手伝いをし

¹ 長廣仁蔵、「精密シートコイルの発明で飛躍する勸業電気機器」工場管理（第29巻第4号）

このケースは、慶應義塾大学教授の鈴木貞彦が、同大学大学院研究科でのクラス討議のために、公表資料に基づいて作成したものである。このケースは経営の巧拙を例示するためのものではない。（1997年12月作成）

Copyright © 1997 by Professor Sadahiko Suzuki of Graduate School of Business Administration, Keio University, Japan. No part of this publication may be reproduced, stored in a retrieval system, used in a spreadsheet, or transmitted in any form or by any means - electronic, mechanical, photocopying, recording, or otherwise - without the permission of the author. (Prepared in December 1997)